

# 高原水車

友の会通信

No. ① (準備号)

## 「高原水車友の会」準備会開催

たかはらすいしゃ

昨年十一月三十日(土)、高松市六条町に残っている水車の保存を考える会の発足に向けて、準備会が開かれました。ご近所の方、物作りに興味がある方、建築家、讃岐うどん関係の方、教師、新聞記者、知人友人の方々三十余名が水車場に集まりそれぞれの感想と夢を話し合いました。あたたかい晴天に恵まれ、水車場見学もおこないました。

司会の川崎正視氏(元高松市教育委員会教育部長)が友人の一人として静かに水車の現状と保存の意味を述べて会が始まりました。続いて高原水車後継者の平田恵美・堀家みどりが、残された水車と水車場を保存するかどうか、これまで数年間専門家の方や瀬戸内海歴史民俗資料館のボランティアの方々にお世話になった経過を話し、協力をお願い

高原水車友の会  
高松市六条町  
高原水車

しました。

次に、記念講演として、瀬戸内海歴史民俗資料館専門職員の田井静明氏が「高原水車の文化的価値について」と題してお話がありました。田井氏は二〇一一年(平成二十三年)九月以来、三年間毎月ボランティアの方々と共に埃にまみれて、水車場の掃除、道具類の調査を進めてこられました。その上で高原水車場の特長、歴史性・希少性、資料の残存状態、讃岐の水車の地域的特性などをたくさんの方々の写真を交えてたいへん詳しく総合的に話しをして下さいました。熱のこもったお話でした。その中で忙しいスケジュールにもかかわらず、愛媛、高知、徳島そして岡山県内に残る水車の痕跡を訪ねて比較を試みられ、高原水車の希少性と貴重性を確認されたことには感動を覚えました。岡山地域との類似性を今後の課題として示唆されたことにも目を開かされました。

すいしゃん



その後、田井さんの説明で水車場を見学しましたが、近所の方は、子ども時代以来、久しぶりの水車との対面で、あらためて感慨深い思いをされたようです。

最後に、集まった一人一人が感想を述べました。

「価値があることはわかった。しかし課題は大きい」「こんなものがまだ残っていることに感激しました」「ものづくりの面で協力



したい」「難しいけれど一歩一歩進めて、夢を語れるようにしたい」など楽しく自己紹介をしました。そして、「意外に近所でも知らない方が多いので、まず知らせましょう。修理

理が出来る前からさまざまな形で、子ども達にも見せたいものだ」という話に落ち着き、作業分野ごとに担当委員さんを決め、話し合いながら緩やかに進めて行くこと、修理についても行政の方と相談しながらやっていくことなどを確認し、四月を目途に「高原水車友の会」を発会することが司会の川崎氏から提案され、散会しました。(平田記)



## 「高原水車の文化的価値について」

田井静明氏記念講演メモより

高原水車場の特長

■ 百年以上の稼働の歴史を持つ

歴史性・希少性

■ 水車器械、機械、水路等すべてが比較的保存状態良く残る

① 瀬戸内・香川の技術的特徴

② 穀物加工器械・機械類の変遷を一望

③ 地元石材で構築、水車創設時のまま残る

■ 讃岐の特徴的な地理環境である溜池水源、水利の中で運営

水に苦労した香川の水環境を反映

■ 水車経営に付随する、うどん・素麺製麺、

七面鳥飼育売買、養鶏・畜産などの資料が残る

水車関連副業資料が残る

■ 水車経営、農業経営、水利関係の史料、道具が数多く伝わる

広範な史資料が伝来

■ 讃岐の水車大工の系譜や技術の中にも位置付けられる

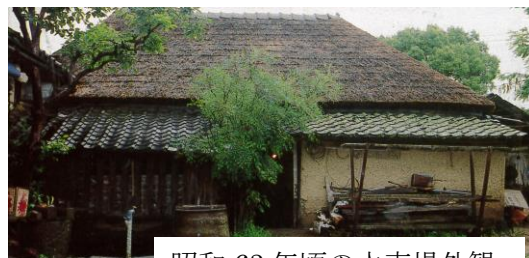
明白な水車製作者の系譜・技術

四国及び岡山の製粉精米水車

高原水車の希少・貴重性

今後の現状と課題

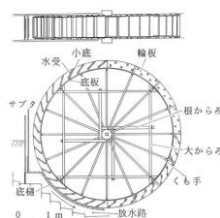
配付リーフレット「保存活動の経過」より



昭和 63 年頃の水車場外観



現在の水車場（東方から見る）

【題字 森佐知子】  
カット 平田真咲

◆江戸時代、旧古川の地形を利用して石垣の水路を造り、水車経営が始まりました。明治 35 年、当時 25 才の高原太吉が譲り受け、製粉、精米、精麦、製麺などの事業を懸命に続けました。水車は水の管理と石臼、歯車、水路などのメンテナンスが絶えず必要です。水車を動力源とした古い製粉機構には先人の知恵が詰まっているようです。ふたたび水車がザーザーと水音を立てて回る姿に現代の私たちや子供達は何を感じるのでしょうか。（水車友の会発起人）

「高原水車友の会」通信 第1号（準備号）  
発行 高原水車友の会準備会  
平成二十六年二月一日